

第三章 近松の生きた時代

一、江戸時代の幕開け

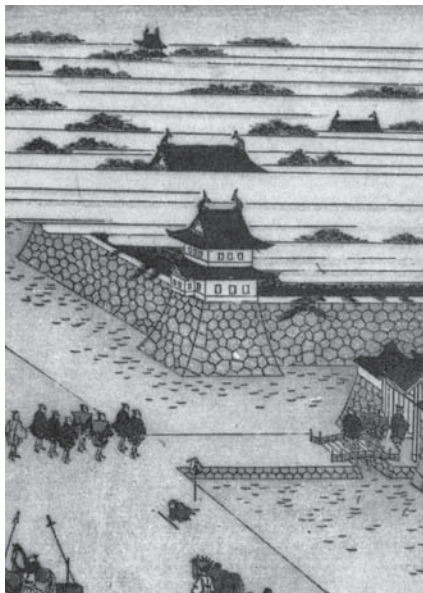
慶長五年（一六〇〇）、関ヶ原合戦で勝利をおさめた徳川家康は、同八年（一六〇三）江戸に幕府を開きました。江戸幕府は徳川将軍を頂点におき、中央に幕府、地方に藩をおく政治体制をとり、大名支配のため「武家諸法度」などの法律を發布しました。また、「参勤交代」を強化し、全国の主要な鋤山を支配します。

江戸時代は「士農工商」という言葉で言いあらわされるように、厳しい身分制が確立されていました。「武士の子は武士。農民の子は農民。」といわれたように、身分は固定されていました。

しかし、江戸時代は概して平和な時代でした。大坂夏の陣（一六一五）以降、島原の乱（一六三七）を除いて、幕末にいたるまで内乱（戦争）もなく、およそ二

百六十年余り続きます。

この間、三代将軍家光いえみつは「鎖国」さこくを実施し、一部の地域を除き、海外との交易を禁止したため、日本固有の文化が育っていきました。江戸中期になると三都さんと（京都・江戸・大坂）などの大都市を中心に、次第に経済や文化が発展していきました。



『徳川盛世録』より



二、元禄時代と元禄文化

延宝八年（一六八〇）、徳川綱吉とくがわつなよしが五代將軍となります。日本史では、綱吉の將軍在任期間を「元禄時代」と呼んでいます。文化史のうえでは、さらにこの在任期間の前後を含めた時期をさす場合もみられます。

元禄時代には、幕府の制度も安定し経済も発展してきました。しかし、この時代には大名などの改易かいえき、取り潰しつぶが集中し、また、悪法といわれる「生類憐れみの令」れいや元禄地震（一七〇三）、富士山の大噴火（一七〇七）、さらに諸国における洪水など自然災害もたびたび発生し、人々を苦しめました。

赤穂浪士の討ち入りあこうろうしうちいりのように江戸時代を代表する大事件もみられました。

赤穂浪士の討ち入りは、「武士の義理」を貫いたもので、





忠臣蔵「討入」図(鯖江市中野町所蔵)

浄瑠璃や歌舞伎作品の題材にもなっています。

こうした社会情勢のなかにあつて、江戸時代の町人は、新たな文化を創りあげました。これが「元禄文化」と呼ばれるものです。江戸時代の文化の中では元禄文化が最も華やかなものでした。

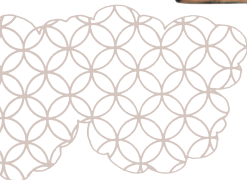
元禄文化は、とくに上方かみがた(大坂)の町人が文化の担い手になてになり、江戸期を代表する文化になりました。井原西鶴いはらさいかくの

浮世草子（小説）、近松門左衛門の浄瑠璃・歌舞伎をはじめとして、松尾芭蕉の俳諧（俳句）や菱川師宣の浮世絵、また、染色・陶磁などの工芸、詩歌、音楽（音楽）といったさまざまな分野で文化が花開き、庶民にも広く普及しました。

印刷技術も進歩し、出版業が活発化しました。中国や日本の古典のほか、「草子」と呼ばれる大衆図書が好んで読まれました。「和算」（日本独特の数学）も盛んになりました。

こうした文化の充実は人々の心に潤いを与えていきます。とくに、近松が取り組んだ浄瑠璃は、人間らしく生きようとする人々の喜びや、悲しみ、苦しみが見事に描かれ、観る人に大きな感動や共感を与えました。たとえば、正徳五年（一七一五）大坂竹本座での『国性爺合戦』は大人気で、十七カ月余りの長期興行となりました。近松の流れるような文体を基に、義太夫節の語り、三味線、巧みに動く操り人形が一つになった演技が多くの人の心を打ったのでしょう。

ていきんおうらい
『庭訓往来』(鯖江市資料館所蔵)
時候のあいさつ文が記された文
例集で、広く武士から庶民まで
重宝された。寺子屋などでは教
科書として用いられていた。



三、三大文豪ふんごうの活躍

井原西鶴・松尾芭蕉・近松門左衛門の三人を、元禄三大文豪と呼びます。そこで、ここでは井原西鶴と松尾芭蕉について書いておきます。

井原西鶴（一六四二～一六九三）は、大坂の生まれです。四十歳の時に発表した『好色一代男こうしやくいちだいおとこ』が好評をえて、その後、『好色二代男こうしやくにだいおとこ（諸艶大鑑）』・『好色五人女ごにんおんな』を書き、町人たちの生活や当時の風俗をいきいきと描写しました。また、元禄元年（一六八八）には『日本永代蔵にっぽんえいたいぐら』を発表し、身近な町人たちの経済生活を描き、永く大衆に支持されました。その後、浮世草子の手本として多くの影響を与えていきました。

また、松尾芭蕉（一六四四～一六九四）は伊賀国上野いがのくにうえの（現在の三重県上野市）の生まれです。三十四歳のころ、俳諧の師匠として独立し、延宝八年（一六八〇）には住居を江戸深川ふかがわに移しています。門人が、庭に芭蕉の株を植えたことから、こ

の住居のことを「芭蕉庵^{ばしょうあん}」と呼び、「芭蕉」の俳号を用いるようになります。

芭蕉の句は、自己の生活の中に「わび」「さび」（落ち着いたおもむきのこと）の世界を表現しました。また、芭蕉は人生を旅ととらえ、『野ざらし紀行^{のきこう}』や『奥の細道^{おくほそみち}』など多くの紀行文を残しています。なお、芭蕉は『奥の細道』の旅で、越前にもきています。その時期は元禄二年（一六八九）八月で、金津^{かなづ}から福井^{ふくい}、永平寺^{えいへいじ}に参詣^{さんけい}したあと、麻生津^{あそうづ}、鯖江^{さびえ}、武生^{たけふ}を経て、敦賀^{つるが}に向っています。



芭蕉も通った「旧北陸道」の図(鯖江市資料館所蔵)

四、人形浄瑠璃と歌舞伎

人形浄瑠璃というのは、浄瑠璃の語りと、三味線しゃみせん、それに操り人形とが結びついた総合演劇です。江戸時代に入って上方で普及し、元禄期に竹本義太夫が出て流行しました。京都や江戸・大坂の芝居小屋では人形浄瑠璃や歌舞伎などが盛んに演じられていました。

近松の浄瑠璃作品は百編を超え、これらは「時代物じだいもの」と「世話物せわもの」に大別されます。「時代物」というのは、歴史上の出来事・事件や伝説をヒントにした作品で、英雄なども登場します。「世話物」は身近な町人の姿を簡潔な形式で表現したものです。

江戸時代には歌舞伎もおおいに流行します。元禄時代に入ってから歌舞伎をとくに「元禄歌舞伎」と呼びます。有名な市川団十郎いちかわだんじゅうろうや坂田藤十郎などの人気役者が活躍し、数多くの新作が上演されました。元禄歌舞伎の世界でもきわだっていた

のが近松です。近松は『傾城^{けいせい}壬生^{みぶ}大念仏^{だいにんぶつ}』や『一心^{いっしん}二河白道^{にがびやくどう}』などおよそ三十点の作品を発表しています。近松四十歳（数え年で四十一歳）から十年間の活動は、歌舞伎作品の執筆に重点がおかれ、元禄歌舞伎の中心的な担い手として、大きな役割を果たしました。

ふるさと越前を舞台とした作品（浄瑠璃の『傾城^{けいせい}反魂香^{はんこんかう}』や歌舞伎の『傾城^{けいせい}仏^{ほとけ}の原^{はら}』など）をはじめとして、今日でも多くの近松作品が演じられ、人々に感動を与え、親しまれています。



近松作『夕霧阿波鳴渡（吉田屋の段）』〔尼崎市提供〕